

生徒に自信をつけ積極的に外に出す 中学校のダイナミックなキャリア教育

— 山形・市立 長井北中学校 —

全教員が常にキャリア教育を意識しながら教育活動全般を行っている一例として、今回取り上げたのは「中学校」。生徒同士が自他のよさを認めあい、協力しあいながら力をつけていく取り組みは、高校でも参考になるだろう。高校に入学する生徒たちは、どんなキャリア教育を受けてくるのかを知る一助にもなればと考えている。

取材・文／永井ミカ

● 実践のKeyword

中学校

自尊心育成

自己有用感育成

総合的な
学習の時間

校外体験学習

地域連携

**キャリア教育を研究主題に掲げ
教育活動全般に視点を取り入れる**

今回、先進校の事例として異例の中学校を取り上げたのはいくつかの理由がある。第一に紹介したいのはカリキュラムだ。生徒一人ひとりのキャリア発達を支援するための、発達段階に応じた課題設定とそれに対応する実践内容の工夫は高校でも参考になるだろう。第二は組織体制。管理職から一人ひとりの担任まで、全教員が教育活動全般をキャリア教育としてとらえ、その概念が学校の隅々にまで浸透している点だ。

多くの中学校では、およそ3年ごとに「研究主題」を設け、教員の研修を兼ねて全員参加の研究を行っている。同校の2009年度からの研究主題は「未来を拓く力を育てる～自分を見つめ、共に生きる力を育むキャリア教育をめざして～」。自尊心の育成をベースに、学級活動や「まちなか科」と名付けた総合的な学習の時間、学び合いを取り入れた教科学習などを通じて、自分のよさを伸ばし、他の人よりよくかわりながら自らの手で未来を切り拓こうとする力を育成することを目標としている。研究を進めるにあたって、分掌としては別に4つのセクション（特別活動研究部、教科研究部、まちなか科研究部、調査・連携研究部）を設け、全教員がそのいずれかに所属している。

長井北中学校でキャリア教育の考え方を整理・明文化し推進したのは、前校長の

布施清先生。布施先生は、生徒がいずれ直面するであろうさまざまな問題に柔軟に、かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立するためには、キャリア教育が必要であると説き、常にその重要性を、教員にも保護者にも、また外部の人に対しても発信し続けた。

また、理念を説くだけでなく、調査・連携研究部がキャリア教育の系統化とアンケート等での効果チェックを担い、ほかの3つの研究部は主に実践を通じた研究を行う体制を整備。さらに、年4回の校内全体研究会開催や地区の進路指導研究大会の自校開催など、教員が常に研究と向き合う環境を作ることによってキャリア教育の概念を浸透させ、結果、学級活動や授業でも常に意識されるようになった。

**自尊心を育成することが
未来を切り拓く基盤となる**

同校がキャリア教育を推進する中で、特に大切にしていることが「自尊感情の育成」である。「今の子どもたちを見ると、自尊感情の低さを感じます。手本のない世代、何を目標せばよいのかわからない世代なのでしょう。しかし、自尊感情をきちんと確立できれば、さまざまなことに自信をもつて対応でき、それが人間関係を築いたり、困難なことに挑戦する意欲、ひいては自分の未来を切り拓くことにつながっていくはず」と梅津和吉校長先生は言う。

自尊感情が社会的・職業的自立の基盤



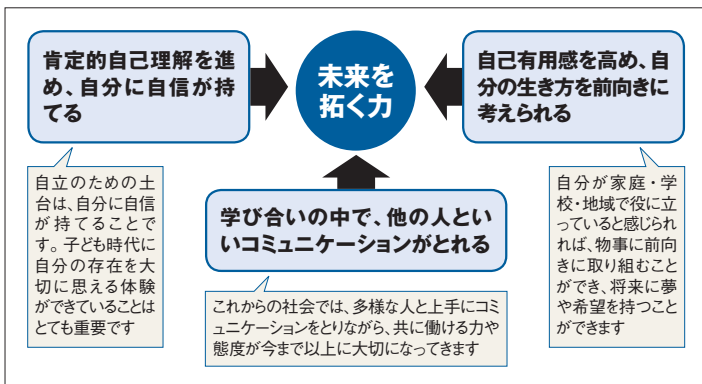
School Data

市立中学校 / 1982年創立
 生徒数 / 349人(男子170人、女子179人)
 山形県長井市成田2883
 TEL 0238-88-5355
 URL <http://www2.jan.ne.jp/~kitachu/>

Outline

長井市は山形県南部にある人口約3万人の市。あやめをはじめ花と緑にあふれる美しいところで、冬は降雪量が多い。市内に2つある中学校のうちのひとつが長井北中学校。今年度創立30年を迎えた。古くから職業体験やボランティア活動などを行ってきた歴史もあり、地域とつながり地域に開かれた学校である。昨年度は東北地区中学校進路指導研究大会山形大会および山形県中学校進路指導研究大会を開催するなど、キャリア教育では先進校として地域を引っばっていく存在でもある。

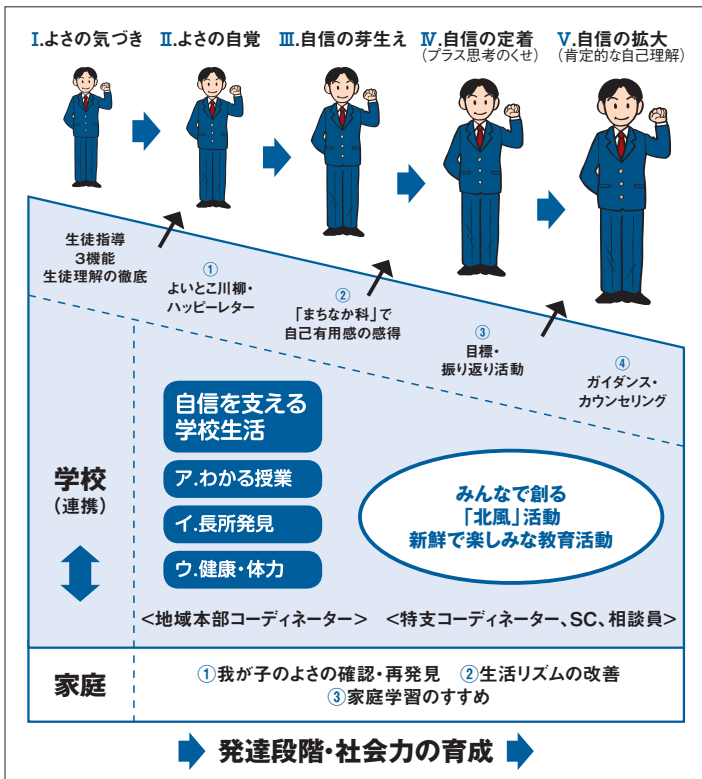
図1 生徒に身につけさせたい力



となるといつことに着目して同校の教育を構想図にしたのが図2。自尊感情はIの小さな気づきからはじまってVにある自信の拡大まで、順を追って身につけていくものと仮定し、学校と家庭が連携して成長を支える。教師は生徒指導の三機能(自己決定の場を与える、自己存在感を与える、共感的人間関係を育成する)や生徒理解の徹底を意識して教育活動にあたる。そのうえで、①から④の独自の取り組みを行っている。

①のよいとこ川柳やハッピーレターは、友達のよいところを書き出し本人に渡すという取り組み。家庭版として、保護者にも子ども向けメッセージを書いてもらうことで、

図2 自尊感情育成の構想図



生徒の自尊心を高める工夫をしている。②のまちなか科は体験学習で自己有用感を高める取り組みで、詳細については後述する。③は文字通り、どんなことでも必ず目標を立て、振り返りを行うということ。同校には「マイ・レジエンド」という用紙(★)があり、例えば運動会だったら、運動会の目標と1週間分の日記 終ったあとに感じたことを書くようになっていく。特徴的なのは、マイ・レジエンドにも「あなたが見つけた、先輩や後輩、友達のよいところは？」という設問があるところだ。

「友達や先生に言ってもらったことで、生徒に少しずつ自信がついてくるのがわかります。また、振り返りをするのは、自分の成

長を実感するためです。保護者会や懇談会でも、必ずこういった学校の取り組みをアナウンスし、家庭の協力を仰いでいます」と、大竹仁教頭先生は言う。

そして、④のガイダンス・カウンセリングでは、「一人ひとりの生徒ときちんと向き合う。同校では、研究主題に「キャリア教育」という言葉を取り入れる前は、「一人ひとり」というキーワードを使うことが多かった。「二人ひとり」にかけがえのない良さがあるということが、まず教育のベースにある。それは長井北の伝統です」と梅津校長先生。こういったことに日々細かく取り組んでいくことで、生徒の自尊心が少しずつ育っていく様子は、図4のアンケートからもわかる。



ふるさと観光大使「あやめんご」活動。東京の商店街でさまざまなパフォーマンスを披露し、人だかりもできた

進路学習と関連させながら 校外体験学習を実施

「昨年度、総合的な学習の時間」「まちなか科」で行ったのは各学年2つの体験学習。ボランティア活動は全学年で、「まちなか・デザイン・プロジェクト(MDP)」は1年生と3年生で、職場体験は2年生で実施した。MDPや職場体験については、市中の公園で町の人々に成果を発表している。

体験学習と同時に系統だつて行われる進路学習(図3)は主に学級活動の時間を使う。他の多くの中学校と同様、1年「自己理解」、2年「職業理解」、3年「進路選択」という流れで学習し、それは10年ほどまえから変わっていない。

体験学習においては生徒を学校の外に出し、地域の人の理解を得て学ばせてもらう。教員は「ひとつの活動の意味をしっかりと考えて指導にあたる。また、教員だけでなく生徒にも意味を考えさせる。」例えばボランティアなら、生徒会が全校生徒を集めて集会を開き、何のためにボランティアをするのか、どんなことを大切にしてボランティアをするのかを話し合います。そして自分たちで計画も立てる。これがわが校の大きな特徴だと思います」というのは、教務主任の金田孝善先生。そして、どんなときでも、「マイ・レジエント」を活用し、「目標を立てる・実行する・振り返る・友達の良いところを見つめる」をセットにしている。

今年度はボランティア活動の意義を生徒が実感しやすくするため、部活を活動

図3 進路学習・キャリア教育年間計画(2010年度)

1.目標

第1学年	第2学年	第3学年
<ul style="list-style-type: none"> 夢と希望を持って、充実した中学校生活を送れるようにする 進路学習、自己理解への関心を高め、進んで自己の進路を計画しようとする態度を養う 	<ul style="list-style-type: none"> 職業や上級学校の情報をもとに、自分の適性を踏まえた進路計画を立てさせる 自己理解を深めるとともに、進路の希望や計画を吟味し、実現しようとする態度を養う 	<ul style="list-style-type: none"> 将来に対する不安を解消し、希望の実現に向けて努力する態度を養う 自分の特性や希望する進路の情報を確認し、その進路に適応するために必要な態度を養う

2.年間指導計画(学級活動、学校行事を中心とする体験活動)

※自尊心的育成関係は省略

月	1年	2年	3年
4	□適応指導(1~3年) MDP グループ分け・討議	□適応指導(1~3年) CDW 事前学習	○あやめんごPTAお披露目会 □適応指導(1~3年)
5	■私の夢や希望① ■夢に向かって①	■人はなぜ働くの?①	○修学旅行(あやめんご活動) ■自己PRをしよう②
◎全校ボランティア<はつと・ハート・DAY>			
6	■進路学習って何?① MDP フィールドワークグループ討議	■職業とは何だろうか① ■職業の内容や特色① ■職業と特性① CDW 準備・事前指導	■進路選択の流れ① ■進路希望先の調査① ■進路の決定と修正方法①
7	■ホームキャリアウィークに向けて①	■移り変わる職業の世界① ◎長井CDW(5日間)	■面談・体験入学に向けて①
◎全校 地域ボランティア<はつと・ハート・DAY>			
9	■働くとは職業とは?① ■身近な人々の職業① ■働く人々の考え① MDP パネル制作発表練習	CDW 発表準備	MDP 発表準備
10		■卒業後に学ぶ道①	■進路計画の検討①
◎まちなか・デザイン・プロジェクト・長井CDW 発表・まとめ			
11	■人と個性① ■自分の特色①	■なぜ高校に進むのか① ■高校調べ② ■高校調べの発表①	■進路選択のあり方① ■卒業後の進路変更① ■進路の悩みと上手につきあおう①
12			■進路の最終決定① ■自立した生活①
1	■自分の将来とお金②	■自分らしい進路を考えよう②	■受験にあたって①
2	■進路計画の必要性① ■私の進路計画①	■将来をデザインしよう①	■将来への準備①
3			■未来の私へのエール①

体験学習の集大成として 東京の商店街で観光PR

「まちなか・デザイン・プロジェクト」は地域の課題に気づき、解決策を考え、生徒たちが地域の人たちに向けて発信するものだ。もともとは美術の時間を使い、アート・プロジェクトとして、郷土や命に関するアート(木のオブジェなど)を制作・展示したのが始まりだった。そこにキャリア教育の視点を取り入れ、内容を変更したのである。

「キャリア教育の後押しをすると同時に、とにかく生徒を外に出してアピールさせたかったし、地域の人たちにも中学生を理解してもらいたいと思いました。ボランティア活動では、保育園や老人ホームなどで小さな子どもやお年寄りと接する機会は多か

ったのですが、もっと歳の近い地域の若者や働き盛りの大人とも交流させたかったという理由もあります」と言うのは、美術の須田成先生。そこで、社会科の金田先生とともに地域の活性化や地域の課題解決などの視点を取り入れ、2人の先生を中心にプロジェクトをスタートさせた。

グループを作り、市役所や地元の有識者などのところへリサーチに行き、問題点を探る。その問題点を解決するアイデアを考え、パネルや模型を制作し、路上発表会を行うのである。それを、学校評議員、商店街の代表、まちづくりNPO、学識経験者などから審査してもらう。これまでに、祭りのキャラクターや商店の包装紙、車に貼る観光用マグネットシート、新作スイーツなどの提案が実際に採用され、生徒の自己有



1年主任
大場 曉美先生



2年主任
須田 一成先生



教務主任
金田 孝善先生



教頭
大竹 仁先生



校長
梅津 和吉先生

用感を育てるのに「役買っている」。

そして、これらの体験活動の集大成として2010年に行われたのが、3年生のふるさと観光大使活動「あやめんこ」である（11年度は東日本大震災の影響で中止）。ボランティアの経験も積み、職場体験を通して地元の企業のことも学んだ。また、デザイン・プロジェクトを通して地域の問題点を探り解決するという体験もした。それらの学びの成果を発表できないかと考え、東京への修学旅行の機会を利用して長井の観光PRを行ったのである。

準備を始めたのは2年生の8月。伝統的な黒獅子舞を舞うグループや、地元のおやめ公園100周年を祝うあやめ太鼓の演奏をするグループなどは、地元の人たちに講師を迎え練習を重ねた。また、あやめの鉢植えをプレゼントするグループは、当日、あやめが咲いているところも見てほしいと、ハウスを使ったあやめの促成栽培に挑戦。日本で初めて成功した。

翌年5月、地元の特産物を販売するグループなども合わせ計6グループに分かれた3年生が、観光大使として置賜地域地場産業振興センターの東京事務所がある東京大田区の商店街を訪問。パフォーマンスを披露したり、特産物を紹介したりした。「生徒たちが物怖じせず楽しんでいたのが驚きでした。黒獅子舞の先生など地域の大人も同行してくださいましたが、心配は無用で、自分たちで通行人に声をかけたり、いつもとは違う積極的な姿が見られました」と言うのは、当時3年主任だった大場 曉美先生。

生。この活動を通して、生徒たちはふるさとへのよさに気づき、多くの人と触れ合うことができ、人間関係形成能力や問題解決能力を育てることができた。また、新聞や広報誌に取り上げられ、市長など各方面からほめてもらい、充実感、満足感、自己有用感をもつことができたという。

**キャリア教育は生き方教育
継続性が大切**

こうした実践を積んできて、先生方が高校に望むのはキャリア教育の継続である。「私たちはやけど広い意味でのキャリア教育というものがわかり始めたところです。高校でも継続していただければ、キャリア教育の本当の狙いにも近づいていけると思います」と金田先生。須田先生は「例えば、地域の課題を挙げさせると観光に偏ってしまうのは、中学生の経験の浅さも原因でしょう。同じテーマでも高校で学習すれば、また学びも深まると思います」と言う。

どの先生も口をそろえるのは、「生徒にたくましくなってもらいたい。幸せになってほしい」ということ。生徒へのアンケート(図4)を見ると、キャリア教育によって自尊心が育ち、将来への考え方もよい変化が感じられる。高校選りも、将来を見据えて熟慮するようになってきたそうだ。ただし、全体では伸びているとはいえ、まだ自己肯定感をもてない生徒もゼロではない。二人ひとりに目を向けたキャリア発達(金田先生)は今後の同校の課題である。

図4 キャリアアンケート

